黒い十字架の鴉

ヴァールシャイン・リヒカイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い十字架の鴉

【Ｎコード】
Ｎ１７３８Ｘ

【作者名】
ヴァールシャイン・リヒカイト

【あらすじ】
親、友がいなく毎日を過ごしていた男がいた。そんな彼は死んでしまい、哀れと思った神様はある程度の力の欠片を与えて転生させる。これは、初めて得ることができた、多くの存在を守り抜こうとする鴉の話。

少し修正しました

主人公とヒロイン設定

主人公
カヌート・ミラージュ

性別
男

年齢
原作開始２１歳

種族
黒い鴉鳥人（バードリング）

地位
サヴァイブの次期国王

身長
１８０ｃｍ

体重
８０ｋｇ

ＣＶ
子安武人

機体
シャドウセイヴァー

機体説明

転生した先で両親がニュータイプの息子のために極秘に開発していた機体でパイロット認証システムでバクートにしか操縦できない。通常のアシュセイヴァーと比べて黒でカラーリングされており、大幅な改造がされている。サイコフレーム、サイコミュ、ナノスキン装甲、武装もソードブレイカーの強化型、クロス・ソードブレイカーを装備して制御にサイコミュを使用している。最大の特徴は、エネルギー再生機関「マナドライブ」を搭載していること。これは獣人族の使える魔術の中にある、永久的にエネルギーを得られる魔術の刻印を魔術に反応する素材、「エクスコア」に組み込むことで、エネルギーが再生されるドライブである。両肩には、カヌートのパーソナルマークである輝く黒い十字架が描かれ、「ダーククロス」と呼ばれることがある。

機体ステータス

［ＨＰ］：４５００
［ＥＮ］：２００
［運動性］：１３０
［装甲値］：１３００
［サイズ］：Ｍ
［移動力］：６
［移動タイプ］：空・陸・海
［地形適応］：空Ａ　陸Ａ　海Ａ　宇Ａ

特殊能力

ＨＰ回復Ｓ
ＥＮ回復Ｓ
ビームコート
ジャマー

武装
レーザーブレード
ファイアダカー
ガンレイピア
ハルバートランチャー
クロス・ソードブレイカー

パイロットステータス
［性格］強気
［格闘］１５５
［射撃］１５５
［防御］１１０
［技量］１８０
［回避］１３０
［命中］１３０
［ＳＰ］５０

特殊技能
ニュータイプ
ＳＰ回復
指揮
底力
援護攻撃
援護防御
マルチコンボ

精神コマンド
［ＬＶ１］：ひらめき
［ＬＶ５］：必中
［ＬＶ１５］：直撃

［ＬＶ２５］：覚醒
［ＬＶ３５］：絆
［ＬＶ４５］：愛

ＢＧＭ
ＤＡＲＫ　ＫＮＩＧＨＴ
極めて近く、限りなく遠い世界に

ヒロイン
シェアリィ・エルミレス

性別
女

年齢
２０歳

種族
白い鴉鳥人（バードリング）

地位
少尉

身長
１７０ｃｍ

体重
６０ｋｇ

ＣＶ
水谷優子

機体
アシュセイヴァー

機体説明
カヌートの両親が開発してたアサルトドラグーンシリーズの機体。こちらもシャドウセイヴァーと同様サイコフレーム、サイコミュを搭載して、ソードブレイカーの制御をサイコミュで行っている。シャドウセイヴァーとは兄弟機になる。

機体ステータス
［ＨＰ］：４０００
［ＥＮ］：１５０
［運動性］：１２０
［装甲値］：１２００
［サイズ］：Ｍ
［移動力］：６
［移動タイプ］：陸・海
［地形適応］：空Ａ　陸Ａ　海Ａ　宇Ａ

特殊能力

ビームコート
ジャマー

武装
レーザーブレード
ファイアダカー
ガンレイピア
ハルバートランチャー
ソードブレイカー

パイロットステータス
［性格］強気
［格闘］１５２
［射撃］１５２
［防御］１０２
［技量］１７５
［回避］１２５
［命中］１２５
［ＳＰ］４５

特殊能力
ニュータイプ
底力
援護攻撃
マルチコンボ

精神コマンド
［ＬＶ１］：鉄壁
［ＬＶ５］：必中
［ＬＶ１５］：熱血

［ＬＶ２５］：ひらめき
［ＬＶ３５］：脱力
［ＬＶ４５］：愛

ＢＧＭ
ＡＳＨ　ＴＯ　ＡＳＨ
極めて近く、限りなく遠い世界に

プロローグ（前書き）

指摘があったので一から書き直しをしました

プロローグ

「今日も1日が終わった…」
月が空に昇る夜に、そう言いながらイスに座った。
今まで生きてきた俺には家族がいない
両親は6歳の時に亡くなり、それからは親戚をたらい回し、両親の遺産目当てで俺を引き取ろうとするもの達がいたため一人で生きていくことを決めた
それから一人の日々が始まった
学校に行っても両親がいないだけで友達はできなかった
18歳になった今までも親友はいなく、知り合いもいない

「……やめよう」
考えることをやめた俺は、自販機に飲料水を買いに行った。

月明かりが照らす道を歩く

「（真っ暗だな…俺にはお似合いたな）」

歩いていると十字路の先に自販機が見えてきた。そのまま歩いて十字路に踏みだした時に

ドンッ

突然大型トラックがもうスピードで突っ込んできた、男は突然の事態で動けるはずもなくひかれてしまい、トラックはそのまま走り去って行った

「（死ぬ、か……）」
男は地面に倒れ、多くの血を流していた

男は死ぬ間際

「（俺の、生きる理由はなんだったんだろう…）」
そう思った直後に男の意識は無くなった

気がつくと真っ白な場所にいた

（ここは…）
―哀れな者よ―

突然声が響いた
周りを見渡しても誰もいない
―我は神―
この声の正体は神というらしい
少々驚きながら

（その神が何のようだ…）
―哀れな者よ、汝の生きざまを見させてもらった―
（笑いにでも来たか？）
男は神に尋ねる

―否、我は汝に新たな生を授けにきた―
その言葉に

（どういうつもりだ！）
当然声を少し荒げて聞き返す
―汝の生きざまに、我々神は哀れに思った。そのため、多くの神が
汝に新たな生を授け、二度目の人生を送らせることを願ったからだ―

（……俺は）
不安な声に神は

―恐れるな、必要最低限の力は授ける。では、行ってくるがよい―

その言葉を聞くと強い眠気が襲ってくる

―哀れな者よ、新たな人生で多くのことを学ぶがよい―
その言葉と共に俺の意識は遠退いた

目を覚ますと白い天井が見える。男は一息つこうと息を吐いたら…

「ふぎゃあぁぁぁぁぁ！」
聞こえたのは赤ん坊の声だった

「（こ、声が赤ん坊？それに全身に違和感を感じるが…）」
ふと、神の言っていた言葉が思い浮かぶ

新たな人生

その言葉を思い出した男は「オギャアァ！（転生！）オギャアァァァァァ！（新たな人生とはこういうことなのか！）」

すると足音が聞こえ、一旦止まるとドアが開き、足音が再び聞こえだす。足音が男の近くで止まると

？？？「あらあら、起きちゃったのね」
おそらく母親だろうと思える女性の声が聞こえた。つぶっていた目をあけると

人間ではなく黒い鴉の顔、翼が生えて羽毛の付いた身体の正体は鳥人だった

「ふぎゃあぁぁ！？（鳥人だと！？）」
？？？「んーどうしたのかなぁ」
？？？「どうしたエルミィ」
ドアが開くと同時に低い声を発しながら青い竜人が入ってくる

「オギャアァ！（今度は竜人！）」
エルミィ「この子が起きちゃったのよ、クランシャ」
ベッドに寝ている赤ん坊を抱っこしながら答える

クランシャ「ふむ、元気が良くていいな、俺達の子供は」
その言葉に男は驚いた。
俺達の子供？！俺はこの二人の子供？！

驚く男を母親のエルミィが優しく抱き締めて、父親のクランシャが頭を撫でる

その中で男は昔を思い出した。両親が自分に声を掛け頭を撫でる光景を

「（そうか、俺は…家族に甘えたかったんだな…）」

寂しさが無くなった男は母親の腕の中で甘えるように眠りについた

プロローグ（後書き）

主人公はエルミィとクランシャが大好きになります

［第1部］第1話　己の相棒（前書き）

少し訂正しています

［第１部］第１話　己の相棒

男が転生して１８年たった
男はカヌート・ミラージュという名を授かり、父、クランシャ・ミラージュ、母、エルミィ・ミラージュの二人の間に生まれた

エルミィ「カヌート、ちょっと特殊機体の専用施設に来てくれるかしら？」
カヌート「わかったよ、母さん」
…転生して１８年か

転生した男、カヌートは今、特殊機体の専用施設にいる。親の愛情を受けて過ごし、転生前と比べて穏やかな性格になっている。そんなカヌートが特殊機体の専用施設に呼ばれているのは、ガンダムで有名なニュータイプだからだ

ニュータイプとわかった理由は、クランシャとエルミィは地球とは違う惑星サヴァイブで国王と研究リーダーを勤めて機体を製造してる。カヌートが１６歳の時、休みの日にクランシャが弄っていたニュータイプ識別装置をカヌートが触れて、反応をしてしまったからである。１２歳の頃からパイロットの訓練を受け、優れた実力を持っていたカヌートはそれをきっかけにサヴァイブの機動部隊の指揮を執るようになる

専用施設の研究員に案内されやってきた格納庫に母、エルミィがいた

エルミィ「ごめんなさいねカヌート、突然呼び出して。ちょっと見てもらいたい機体があるのよ」エルミィが違う方向を向くとカヌートも追って同じ方向を向く

そこには黒い色をした機体、両肩に輝く黒い十字架が描かれたアシュセイヴァーに似た機体が鎮座していた

カヌート「これは…」
機体を眺めているとエルミィが説明する
エルミィ「シャドウセイヴァーよ、貴方専用の機体ね。今日はシャドウセイヴァーのテストをしてもらいたいのよ」
カヌート「わかった、パイロットスーツは？」

パイロットスーツに着替えたカヌートはシャドウセイヴァーのコクピットに入って指示を待っていた。コクピットに通信が入る

エルミィ『準備はいいかしら？』
その言葉に
カヌート「準備完了！」
シャドウセイヴァーの目に青い光がやどる
オペレーター『システムオールグリーン、発進どうぞ』

リニアカタパルトに乗り構える

カヌート「カヌート・ミラージュ、シャドウセイヴァー、出る！」

リニアカタパルトに射出され空を黒い十字架が飛ぶ

［第1部］第1話　己の相棒（後書き）

ちなみにカヌートはクランシャの息子ですから次期国王です

第2話　性能テスト

リニアカタパルトで射出され上空にブーストをして、滞空状態にする

カヌート「いい機体だな、ゲシュペンストやランドグリーズより扱いやすい。これなら、ガルラ大帝国やラダムとも戦いやすくなる」
思わずつぶやく

エルミィ『貴方に合わせて製造したからねぇ、それよりマナドライブの調子はどうかしら？』
魔術を組み込んだ動力の調子を聞かれる

カヌート「良好だよ、それよりテストの内容は？」
これから行うテストの内容を尋ねるカヌート

エルミィ『実戦テストよ、指定のポイントに向かって頂戴』
シャドウセイヴァーに向けて指定ポイントの座標が転送される

カヌート「わかった、指定ポイントに向かう」指定された座標に向かってブースターを吹かす

指定されたポイントに到着したカヌート。場所は巨大な岩や、小さな岩がある荒野だった
カヌート「（予定時間よりか早くついたな…ブースターの調子も良好か）サイコミュの調子よし、武装の調子よし」
機体の確認をしてるカヌートに通信が入る

エルミィ『予定より早く着いちゃったわね』
カヌート「テストの相手は？」
エルミィ『無人機よ、ゲシュペンストＭｋ－？が３機、ランドグリーズが２機よ』
無人機はペレグリンに乗せてくるらしい

しばらくするとペレグリンが上空に現れた
艦長『カヌート様、只今到着しました』
カヌート「うむ、確認した」
エルミィ『それじゃあ準備はいいかしら？』
操縦レバーを動かしシャドウセイヴァーを上空のペレグリンから遠ざけ地面に足をつける

カヌート「いつでも」
エルミィ『艦長、ゲシュペンストＭｋ－？とランドグリーズを投入しなさい』

艦長『了解。ゲシュペンストＭｋ－？とランドグリーズを投下せよ、テストを開始する』
上空のペレグリンからゲシュペンストＭｋ－？とランドグリーズが投下された

先に動いたのはゲシュペンストＭｋ－？２機。内一機がネオ・プラズマカッターを構え、もう一機がメガ・ビームライフルを構えて突撃してくる

カヌート「来るか、ならば」ハルバートランチャーを突撃してくる２機に構えて

カヌート「ハルバートランチャー、シュート」
発射する。ハルバートランチャーの砲撃はネオ・プラズマカッターを装備したゲシュペンストＭｋ－？を擦り、メガ・ビームライフルを構えたもう一機にヒットする。ファイアダガーで追撃し、直撃させ爆発する。もう一機の方が向かってくるためハルバートランチャーを直し左手にガンレイピア、右手にレーザーブレードを装備して構える

ゲシュペンストＭｋ－？がネオ・プラズマカッターを振り下ろす。対してカヌートはレーザーブレードで応戦するがパワーで劣るゲシュペンストＭｋ－？がネオ・プラズマカッターを弾かれ体制を崩した時を狙って

カヌート「そこだ！」
レーザーブレードで上から真っ二つに斬り、バーニアを吹かして離脱する。真っ二つにされたゲシュペンストＭｋ－？は爆散する

残ったゲシュペンストＭｋ－？とランドグリーズ２機がシャドウセイヴァーに向かって距離を置いて攻撃してくる

カヌート「距離を置くか、それならば」
上空にバーニアを吹かす。ある程度の高さにきたら

カヌート「行け、クロス・ソードブレイカー」
サイコミュで制御したクロス・ソードブレイカーを射出する。射出されたクロス・ソードブレイカーは散開して残りの機体に向かってビームを発射しながら向かっていく。クロス・ソードブレイカーでランドグリーズ２機はリニアカノンを破壊され、ゲシュペンストＭｋ－？はメガ・ビームライフルを破壊されてビームの嵐を直撃し、クロス・ソードブレイカーに貫かれ爆散する。爆風が辺りに広がるのを狙ってカヌートはガンレイピアを発射しながらランドグリーズ２機に向かってブーストしていく。煙が無くなったらガンレイピアの無数のビームがランドグリーズを襲う、そこにレーザーブレード

を構えたシャドウセイヴァーが接近し切り裂く、切り裂いたら射出していたクロス・ソードブレイカーが残りのランドグリーズにビームを浴びせ、シャドウセイヴァーはバーニアを吹かして上空に離脱する。離脱した直後に2機のランドグリーズが爆散し射出していたクロス・ソードブレイカーが装着される

カヌート「テストを終了した」
エルミィ『感想はどうかしら？』
満足感に満ちたカヌートにエルミィが尋ねる
カヌート「いい機体だ、俺に合っているよ」
エルミィ『そう、よかったわ。艦長、残骸を回収して戻ってきて。
カヌートはそのまま直接戻ってきて頂戴』
艦長『了解』
カヌート「わかった」
カヌートは特殊機体の専用施設に向かってブースターを最大出力で吹かせる

専用施設に戻ったカヌートはエルミィに呼ばれて研究所長室にいた

エルミィ「機体の調整は貴方に合った仕様にしておくわ」
カヌート「頼むよ……ん？」
ふとエルミィが持ってる書類に目がいく

カヌート「随分と書類が多いな」
思わずつぶやいてしまう。実際にいつもの2～4倍はあったからだ

エルミィ「じつはねぇ、テストをしてるのは貴方だけじゃないのよね」
カヌート「他に誰が？」
エルミィ「貴方の部下のヴェルクス、フェレアね」自分の他にテストをしている人物の名を聞いてたカヌートは驚く

カヌート「ヴェルクスとフェレアが？」
この2人はカヌートが率いる機動部隊の中でも優秀な者でヴェルクスは補佐を、フェレアは小隊長を勤めている

カヌート「彼らが搭乗する機体は？」
2人が搭乗する機体について聞く。彼らは実力があるためちょっとしたカスタム機程度では相性が合わないのだ

エルミィ「ヴェルクスがラーズアングリフね。彼は射撃が得意な様だからね」
実際にヴェルクスの射撃の腕は一流だ。砲撃戦闘が主な機体と相性は抜群だからな

エルミィ「フェレアがゲシュペンストMk－？・Rよ。彼女はオー

ルラウンダーだからねゲシュペンストシリーズと相性がいいの」
確かに…俺が率いる部隊の隊長をしてるフェレアにピッタリだな

エルミィ「以上よ、戻って結構だわ。」
挨拶をして研究所長室を出る

第2話　性能テスト（後書き）

ちなみにカヌートが使う多くの道具は、黒く染めています

第3話　親子のお茶会

性能テストから1週間の時間が経った

時刻は１３：３０

カヌート「…以上を持って会議を終了する」
現在カヌートの執務室でシェアリィ、ヴェルクス、アルクス、フェレアで会議をしていたが、先程終了した

ヴェルクス「お疲れ様です、カヌート様」
カヌート「ああ、シェアリィ少尉、ヴェルクス大佐の元で日々精進するように、仕事に戻れ！」
ヴェルクス・アルクス・フェレア・シェアリィ「「「はっ、失礼します！」」」

ヴェルクスとアルクスとフェレアとシェアリィが執務室を後にし、カヌートは今日の仕事に取り掛かる。実はこの後にクランシャ、エルミィと茶会があるのだ。幸いにも今日の仕事は少ないので茶会の予定時間１５：００には今日の仕事は終わりそうだった

時刻は１４：５０
茶会の時間の前に何とか今日の仕事が終わった。外に待機させてる兵士に護衛を任せて茶会をするバルコニーに向かう

バルコニーに着くとクランシャ、エルミィが椅子に座っていた。護衛の兵士はクランシャとエルミィに一礼して元の仕事に戻り、カヌートは椅子に座った。傍にいるメイドが紅茶を3人のカップに注ぐ

クランシャ「随分と遅かったなカヌートよ」
紅茶を飲みながらクランシャが尋ねる

カヌート「今日の仕事が残り僅かだったので、つい夢中になりましたよ」
自身の好むレモンティーを飲む。レモンの香りがほのかに漂う

エルミィ「仕事に夢中になるのは構わないけど、身体に気をつけてね」
カヌート「わかっていますよ…」
その言葉に苦笑してしまう。それから暫く紅茶を飲んでいたら

クランシャ「ぬう、どうしたカヌート、調子が優れぬようだが」
先程から静かに紅茶を飲んでるカヌートにクランシャが尋ねる

カヌート「実は最近、背中、翼と翼の付け根、尾と尾の付け根が凝っていまして」
ここ最近カヌートは、仕事やシャドウセイヴァーの操縦訓練で身体中が凝っているのだ

その後、茶会を終えたカヌートは整体士をよんで身体をマッサージしてもらった

第3話　親子のお茶会（後書き）

カヌートはレモンや柑橘類が好きです

第４話　進行作戦準備（前書き）

３話から３年たっています

第４話　進行作戦準備

３年がたった。サヴァイブでは今、とある作戦について会議が日々あっている

地球進行作戦だ。

実はこの３年の間にサヴァイブの軍隊がガルラと戦闘をしている時に太陽系の外に地球を発見し、地球に向かってガルラやラダムと共に戦おうと和平の使者達を送ったのだが、地球側は「我々は貴様ら化け物に屈しはしない」と言って和平なのに侵略扱いをし、更に和平の使者達を殺害した。この行為にサヴァイブの民は恐怖、怒りを覚えた。議会では、このような人間がいる地球を放っておけば銀河は危険と判断して地球侵略計画を立てだした

城にある会議室にて

クランシャ「…アペルクスの製造は？」
元老員「ほぼ完成しております。あとは細部の調整のみです」
アペルクスとはサヴァイブが作った機動要塞だ。各種武装を取り付け、食料生産区もある

カヌート「漸くきましたな…」
クランシャ「ああ、機動要塞完成と共に地球に進行する。地球圏にもラダム、ガルラが現れている、前線で活動する基地も必要だろう。ゲシュペンストＭｋ－？、ガーリオン、ランドグリーズ、ペレグリン、アルバトロスの配備はどうなっている？」
元老員「全軍に配備されております」

カヌートは地球があることに驚いたが、地球人がとった行動に非常に怒りを覚えた。侵略するきはなかったというのに勝手に地球人の都合のいいようにされたこと、和平の使者達を殺したこと、他人を見下す言い方、化け物扱いしたことの報告を受けた時に息が詰まるようなプレッシャーを発生させた

クランシャ「カヌートの部隊はアペルクスを太陽系に移動させる時に着いてきてもらう」
カヌート「自分をですか？」
理由を聞いたカヌートは表情に出さないが驚いた。内容は移動を終えたら地球軍の基地を責めるのだが、その時にカヌートの部隊で攻めてもらいたいらしい。アマテラスやヴェルクスを含め、機体の性

能、兵の実力も良くサヴァイブの中でトップレベルの実力を持つカヌートの部隊でどれくらい戦えるか試してもらいたいらしい。カヌートはその件を承諾した

会議は終了しそれぞれが担当する仕事に戻った

カヌート「諸君、君達に伝えることがある」自身の部下達が普段仕事をしている部屋に執務室から通信して会議の内容を説明する

カヌート「機動要塞アペルクスがもうすぐ完成する。完成と共に地球に侵略することが決定した。なお、我が部隊はアペルクスを太陽系に移動させる大部隊に同行する、太陽系に移動し終えたら地球圏を責める。その時に我が部隊で地球圏の軍を責める。地球圏の実力がどれ程か確かめるためだ」
自分達が地球圏の軍を攻めることに驚く者達が大勢いた

カヌート「アペルクスはもうすぐ完成する。いつでも出れるように準備をしておけ。ヴェルクス大佐、アルクス中佐、フェレア大尉、シェアリィ少尉、我が隊の者達、よろしく頼むぞ」
通信を切り椅子にもたれかかるカヌート

カヌート「ふぅ…」
息を吐いて紅茶を飲む。地球侵略が決定した時にここがスーパーロボット大戦Wの世界と知った時は驚いたが、地球侵略の意志は変わらなかった

カヌート「俺が闘う理由は……このサヴァイブの民を守り、父の後を継いでサヴァイブで過ごす……そのためにも地球は必ず…」

只で済むと思うよな地球人……前世が地球人だからと言って加減などせんぞ。我が民を不安にし、和平の使者を殺し、サヴァイブを責めるなら…俺は、地球を討つ

何があっても…必ずな…

第４話　進行作戦準備（後書き）

カヌートの原作知識はあまりありません。どういったやつが出るくらいしかわかりません

サヴァイブが使用する機体と戦艦

ゲシュペンストＭｋ―？

［ＨＰ］：４０００
［ＥＮ］：１４０
［運動性］：１００
［装甲値］：１１００
［サイズ］：Ｍ
［移動力］：６
［移動タイプ］：陸・海
［地形適応］：空Ａ　陸Ａ　海Ａ　宇Ａ

特殊能力
ビームコート

武装
スプリットミサイル
ネオ・プラズマカッター
メガ・ビームライフル
ジェットマグナム
スラッシュリッパー

ランドグリーズ

［ＨＰ］：４５００
［ＥＮ］：１６０
［運動性］：９０
［装甲値］：１４００
［サイズ］：Ｍ
［移動力］：６
［移動タイプ］：陸・海
［地形適応］：空Ａ　陸Ｓ　海Ａ　宇Ａ

特殊能力
ビームコート
ジャマー

武装
Ｍ１３ショットガン
シザースナイフ
ファランクスミサイル
マトリクスミサイル
リニアカノン

ガーリオン

［ＨＰ］：４３００
［ＥＮ］：１５０

［運動性］：１１０
［装甲値］：１２００
［サイズ］：Ｍ
［移動力］：７
［移動タイプ］：空・陸・海
［地形適応］：空Ｓ　陸Ａ　海Ａ　宇Ａ

特殊能力
ビームコート

武装
マシンキャノン
フォトンライフル
アサルトブレード
バーストレールガン
ソニックブレイカー

ペレグリン

［ＨＰ］：１３０００
［ＥＮ］：２２０
［運動性］：５０
［装甲値］：１３００
［サイズ］：ＬＬ
［移動力］：５

［移動タイプ］：空
［地形適応］：空Ａ　陸　海　宇Ｓ

特殊能力
ビームコート

武装
対空機関砲
ホーミングミサイル
連装ビーム砲

アルバトロス

［ＨＰ］：１４０００
［ＥＮ］：２５０
［運動性］：５５
［装甲値］：１５００
［サイズ］：ＬＬ
［移動力］：６
［移動タイプ］：空
［地形適応］：空Ａ　陸　海　宇Ｓ

特殊能力
ビームコート

武装

対空機関砲

ホーミングミサイル

対艦ミサイル

連装ビーム砲

オリキャラの設定と使用する機体＋母艦アマテラス

ヴェルクス・ディンクル

性別
男

年齢
原作開始２７歳

種族
獅子獣人

地位
大佐

ＣＶ
大塚明夫

機体
ラーズアングリフ

［ＨＰ］：５３００
［ＥＮ］：１８０
［運動性］：１００
［装甲値］：１６００
［サイズ］：Ｍ
［移動力］：６
［移動タイプ］：陸・海

［地形適応］：空Ａ　陸Ｓ　海Ａ　宇Ａ

特殊能力
ビームコート
ジャマー

武装
シザースナイフ
ファランクスミサイル
ビームライフル
リニアミサイルランチャー
マトリクスミサイル
Ｆソリッドカノン

パイロットステータス
［性格］冷静
［格闘］１５２
［射撃］１５８
［防御］１２５
［技量］１８０
［回避］１２０
［命中］１３０
［ＳＰ］５０

特殊技能
指揮
底力
援護攻撃
ガンファイト

インファイト

精神コマンド

［ＬＶ１］：必中

［ＬＶ５］：狙撃

［ＬＶ１５］：集中

［ＬＶ２５］：鉄壁

［ＬＶ３５］：直撃

［ＬＶ４５］：魂

ＢＧＭ

ＴＩＭＥ　ＴＯ　ＣＯＭＥ

アルクス・ナビーゼル

性別

男

年齢

原作開始３５歳

種族

竜人（ドラゴニュート）

地位
中佐

CV
小林清志

母艦アマテラスの艦長

アマテラス

［HP］：15000
［EN］：300
［運動性］：75
［装甲値］：1600
［サイズ］：LL
［移動力］：6
［移動タイプ］：空・海
［地形適応］：空A　陸　海A　宇S

特殊能力
Eフィールド
EN回復M

武装
対空機関砲
チャフグレネード
艦首魚雷
ホーミングミサイル

連装副砲
連装衝撃砲
トロニウムバスターキャノン

パイロットステータス
［性格］冷静
［格闘］１２８
［射撃］１６０
［防御］１１０
［技量］１８０
［回避］１１０
［命中］１３０
［ＳＰ］５０

特殊技能
指揮
底力
カウンター
援護攻撃
援護防御
支援要請

精神コマンド
［ＬＶ１］：鉄壁
［ＬＶ５］：必中
［ＬＶ１５］：ド根性
［ＬＶ２５］：闘志
［ＬＶ３５］：激励
［ＬＶ４５］：直撃

ＢＧＭ
鋼の方舟、天翔ける龍

フェレア・スレンクス

性別
女

年齢
原作開始２６歳

種族
狼獣人（ウルフリング）

ＣＶ
清水香里

機体
ゲシュペンストＭｋ―？・Ｒ

［ＨＰ］：４７００
［ＥＮ］：１６０

［運動性］：１１０
［装甲値］：１２００
［サイズ］：Ｍ
［移動力］：６
［移動タイプ］：空・陸・海
［地形適応］：空Ｓ　陸Ｓ　海Ａ　宇Ｓ

特殊能力
ビームコート
ジャマー

武装
スプリットミサイル
ネオ・プラズマカッター
メガ・ビームライフル
スラッシュリッパー
ツイン・マグナライフル
ジェットマグナム

パイロットステータス
［性格］強気
［格闘］１５３
［射撃］１５２
［防御］１１５
［技量］１７８
［回避］１２５
［命中］１２５
［ＳＰ］５０

特殊能力

指揮
マルチコンボ
インファイト
ヒット&アウェイ
底力

精神コマンド
［ＬＶ１］：集中
［ＬＶ５］：加速
［ＬＶ１５］：不屈
［ＬＶ２５］：必中
［ＬＶ３５］：熱血
［ＬＶ４５］：愛

ＢＧＭ
ＷＯＭＡＮ　ＴＨＥ　ＣＯＯＬ　ＳＰＹ

第5話　アペルクス完成、そして地球圏へ（前書き）

自分なり書き方頑張ってみました

第5話　アペルクス完成、そして地球圏へ

作戦会議から二週間後、機動要塞アペルクスが完成した。この事は軍と民に伝えられ、二日後に地球へ向かうことが決定した

地球進行日当日

整備長「Ｍｋ－？・Ｒは第２ハンガーに運べ、アシュセイヴァーとラーズアングリフもだ！。おい、ガーリオンとゲシュペンストＭｋ－？、ランドグリーズは第３ハンガーに運べって言っただろ！。シャドウセイヴァーは第１ハンガーだ」

カヌート隊、通称「ファントム隊」は、母艦アマテラスに機体を積み込んでいた。他のファントム隊の戦艦も、機体の積み込み作業をしている

アマテラスブリッジ

アルクス「機体の積み込み作業は？」
艦長席に座りながら、アルクスはオペレーターに尋ねる。オペレーターは、格納庫の状況を調べた

オペレーター「確認しました。只今、７０％完了しています」
アルクス「７０％か…作業を急がせろ」
オペレーター「了解！」
積み込みを急がせるように指示を出すと、後ろにあるドアが開いて

カヌート「やっているな、アルクス中佐。積み込み作業はどれくらい終わっている？」
アルクス「はっ、殿下。現在時刻で、７０％完了しております」
オペレーターやアルクスがカヌートに対して敬礼し積み込み状況を報告する

カヌート「作業は急がせているのか？」
アルクス「はい、急がせるように指示を出しました。数十分程で完了すると思われます。アペルクスの護衛艦隊も準備完了で出発可能です」

そのこと聞きながらカヌートは思った。威厳がある父上が乗るから全員緊張しているな……実は親馬鹿だがな（親馬鹿で何が悪い。ｂｙクランシャ）
そう思っていたら

ピピッ

オペレーター「艦長、殿下、積み込み作業が完了した模様です」
その報告がされたと同時にドアが開き

クランシャ「状況はどうだ？」
カヌートの父親でありサヴァイブ王、クランシャがブリッジに入ってきた。カヌートとアルクスを含めて全員が敬礼する。それに軽く対応し、艦長席の後ろにある特別席に座る

カヌート「父上、ファントム隊の積み込み作業は完了しました。アペルクスの護衛艦隊も準備ができ、何時でも出発できます」
クランシャ「そうか…アルクス中佐、護衛艦隊、アペルクス、ファントム隊に通信を」
アルクス「かしこまりました。オペレーター、護衛艦隊、アペルクス、ファントム隊に通信を」
指示を受けたオペレーターが通信を行う
オペレーター「通信、繋がりました」
クランシャ「ご苦労」

クランシャ「全員、我はサヴァイブ王クランシャだ。漸く機動要塞

アペルクスが完成した。これより地球圏に向かうが、これだけ言わせてもらう……全軍、命を無駄にせずに軍務を行え！！。地球圏進行軍、出発せよ！！」
クランシャの通信が地球圏進行軍に伝わり、護衛艦隊、アペルクス、ファントム隊は地球圏に向かって出発する

地球圏に向かう中、クランシャはアマテラスからアペルクスに移動してＶＩＰ専用の部屋で休み、他の者達は談笑や各自で休んだりしている中

シェアリィ「Ｂランク…まあまあね」
ファントム隊のシェアリィ・エルミレスはシュミレーターで訓練していた。結果はＢランクで、なかなか高い方に入る。だが、カヌートとヴェルクスとフェレアと比べたらまだまだ差がある

カヌート「シェアリィ少尉、訓練か？」
機体のＯＳの調整を終えて自室に向かっていたカヌートは、訓練室でシュミレーターの結果を見てるシェアリィを見かけ、声を掛ける

シェアリィ「はい、そうでございますが、殿下はどうなされましたか？」
カヌート「ＯＳの調整を終えて戻るとこだ…」
ちらっ、とシェアリィの結果を見るカヌート

カヌート「（ＯＳに問題があるな…）」
結果を見てカヌートは、シェアリィの腕は悪くない、ＯＳがシェアリィに合っていないと考えた

カヌート「…シェアリィ少尉、もう一度シュミレーターに入って訓練はできるか？」
シェアリィ「はい、わかりました」
指示に従いシュミレーターに入る。ＯＳの設定画面になるとカヌートは、シェアリィが入っているシュミレーターの入口を開けて中に入る

シェアリィ「ど、どうしました殿下？！」
カヌートの行動にシェアリィは驚くが、気にせずカヌートはパネルを弄って、ＯＳを設定する

カヌート「少尉、このＯＳでやってみろ」
シェアリィ「は、はい。わかりました…」
カヌートがシュミレーターから出る。驚きながらもシェアリィは画面を見つめ、訓練が開始される

シュミレーターの結果はＡランクだった。シェアリィは自分がＡランクを出したことに驚いた。カヌートが設定したＯＳは、バランス重視だった
カヌート「やるなシェアリィ少尉、Ａランクとは。今度からこのＯＳでやってみるんだな」
驚いてるシェアリィを後にカヌートは自室に戻る

シェアリィ「殿下…」
カヌートがすぐ傍に居たことにシェアリィは思っていた
シェアリィ「お慕いしています…／／」

数日後、護衛艦隊、アペルクス、ファントム隊は地球圏に近くまで来てた

カヌート「地球圏まで後少しだな…」
格納庫でシャドウセイヴァーを見上げているカヌートは思っていた
ーもうすぐだ、散っていった同胞達よ。俺を見守ってくれー
地球圏で死んでいった同胞達のことを思っていた時だった

ビィー、ビィー

アマテラスの艦内に警報が鳴り響いた。カヌートは辺りを見渡し通信機があるスペースに向い、ブリッジに通信する

カヌート「艦長、何があった？」
アルクス『ラダムの集団が接近中です！』
カヌート「ラダムだと？！、アペルクスと通信を繋げ」
それを聞いてどうやらラダムはこちらの足止めか何かをしたい、と考えたカヌートはアペルクスの司令室にいるクランシャに通信を繋ぐように言った

ブゥン

カヌート「父上、ラダムの集団が向かって来てるようです」
クランシャ『こちらでも確認したがどうした？』
カヌート「此処は、ファントム隊が引き受けます」
最悪の状況を考えたカヌートは、アペルクスを確実に地球圏に運ぶため、ラダムの集団と一番近いカヌートが率いるファントム隊が足止めをする。クランシャにそう伝えると

クランシャ『了解した、無事に戻ってこい…』
カヌートに無事に戻ってこいと伝えて通信を切り、地球圏に向かっていった

カヌート「聞いていたなアルクス中佐」
カヌートの言葉を聞いたアルクスは直ぐに対応した

アルクス『総員及びファントム隊へ通達、第一級戦闘体制に入れ、繰り返す。総員及びファントム隊へ通達、第一級戦闘体制に入れ。ラダムを殲滅し、アペルクスが地球圏に到着する時間を稼ぐ』
アルクスがアマテラスを含むファントム隊に通信を入れる。カヌートはアルクスに自分も出ると伝え、通信を切り、シャドウセイヴァーの元に向かう。ワイヤーを使う時間が惜しいため翼を羽ばたかせコクピットに搭乗してシートに座りシャドウセイヴァーを起動させてOSを更新させると、通信が入る

フェレア『殿下、艦長から殿下を援護するように言われました』
…アルクスめ、よくやってくれる
カヌート「今、出れるのはお前だけか？」
援護してくれるのはありがたいがフェレアだけが出るのかと聞くと他にも、フェレアの小隊が出るそうだ。他のメンバーは出撃準備をしているらしい。直ぐに出るように伝えてカタパルトに向かい、通信画面にオペレーターが映る

オペレーター「カヌート殿下、出撃どうぞ」
カヌート「了解、カヌート・ミラージュ。シャドウセイヴァー、出撃する」
両ペダルを思い切り踏み込みバーニアとスラスターを噴出させてカタパルトから射出され宇宙空間に飛び出す。

アマテラスの前に移動するとフェレア率いる小隊もカタパルトから射出されてきた

俺はラダムの集団に攻撃するためフェレア小隊を率いて向かう

やれやれ、数は揃えているか。
フェレアの小隊に左方向からやってくるラダム獣を任せて、俺はフェレアに援護を任せて右方向に向かう

カヌート「墜ちろ！！」

フェレアのメガ・ビームライフルの援護を受けながらレーザーブレードでラダム獣を斬る

相変わらずいい腕してるなフェレア

ピピッ

んっ、ヴェルクスやシェアリィ、アマテラスに搭載している機体が出撃しただと？

助かるな、さっきからアマテラスの攻撃で数も減ってきている

戦闘が開始されてから、どれくらいたったかな

ラダム獣の触手や体当たり、毒液を避けながらガンレイピアを射つ

この状況ならば…試して見るか

カヌート「シェアリィ少尉とフェレア小隊、防御を任せた」

シェアリィ＋フェレア＋フェレア小隊員『『『了解』』』

さてと、やるか

機体を前線に向かって動かしてハルバートランチャーを装備し、クロス・ソードブレイカーを射出する

前線にたどり着くとハルバートランチャーを構え、クロス・ソードブレイカーをシャドウセイヴァーの周りに展開する

フルチャージバーストで片付ける…

俺はハルバートランチャーとクロス・ソードブレイカーのチャージを開始し、前線で戦っている味方に下がるようにと通信する

母さんに頼んでクロス・ソードブレイカーの攻撃をチャージして発射できるように頼んでよかったな

チャージする隙を狙ってラダム獣が攻撃してくるがそこは安心

シェアリィやフェレア小隊が防御や迎撃してくれる

ピピッ

よし、チャージ完了だ

カヌート「沈めぇぇぇぇ！！！」

青い光と緑の光がラダム獣を貫き、悲鳴をあげながら死んでいく

それを見届け俺はアマテラスに帰還した

アマテラスに帰還してハンガーを使用して降りると整備兵が集まってくる

整備兵「ご無事でしたか殿下！」

カヌート「ああ」

皆、心配性だからな

そう思いながら俺はブリッジに向かって足を進めた

ブリッジにたどり着いた俺はアルクス中佐に状況を聞く

アルクス「殿下が行ったフルチャージバーストでラダム側の勢力は、残り２０％になりました」

よし、成功したぞ

引き続き残存勢力を迎撃するように指示を出して、艦長席の隣の席に座る

しばらくすると戦闘が終了し味方が帰還してきた

対応を艦長に任せて俺は父上に通信する

クランシャ『ほう…カヌートよ、よくやったではないか』

戦闘結果を父さんに伝えたら褒められた。
アペルクスのことを聞くと無事に地球圏に到着し宣戦布告を行ったらしい

カヌート「今から其方に向かいます」

補給の準備をしてくれると嬉しいんだけどな

クランシャ『わかった、なら補給の準備をしておく。敵対勢力を攻める件は他の部隊に任せている。アペルクスがある座標が送るから来い』

それは助かるな
弾薬を消費した今
戦闘はきつい

それから通信を切りＡＳＲＳを展開して送られてきた座標に向かった

アペルクスに到着した俺は迎えに来た兵から「陛下が呼んでいます」と言われ司令室に向かった

司令室に入ると父さんが椅子に座り腕を組んで待っていた

何か不味いことをしたのか俺…

クランシャ「よく来たな、カヌートよ」

カヌート「何ですか、父さん」

呼んだ理由を聞くと、俺が心配だったので連れてくるように頼んだらしい

それから一通り話をした俺は今日は休めと言われ司令室付近に用意されたＶＩＰ専用の部屋で眠りについた

第6話　ヴェルクスVSカズマ　前編

翌朝になると俺は父さんに呼ばれ司令室に来ていた

カヌート「父上、どうしましたか？」

クランシャ「うむ、お前に頼みたい事があってな」

頼みたい事？

疑問に思いながら父さんに内容を尋ねる

クランシャ「我とお前、ファントム隊のアマテラスは暫くしたらサヴァイブに戻るのはわかるな」

カヌート「はい……わかっていますが…」

それが一体どうかしたのか？

クランシャ「サヴァイブに戻る時、お前のファントム隊の一部をアペルクスの戦力にしたいと思う」

アペルクスの戦力か…

だが指揮官はどうするか考えていると、俺に父さんが声を掛ける

クランシャ「無論補佐は就かせる、お前優秀からな。経験が必要だ」

経験か…補佐もいることだし

カヌート「わかりました、どうぞお使いください」

ファントム隊がやれるかわからんがやってみせるだろうな、あいつらは

クランシャ「ふふ、お前なら言ってくれると信じていたぞ」

父さんが笑いながら俺の方を見てると

コンコン

クランシャ「うむ、入ってくれ」

プシュー

???「失礼します」

ドアが開くと狼獣人の男が入ってきた

???「陛下、フォンス・アルベート少将、只今参りました」

フォンス少将…確かヴェルクスが同期だっていって

クランシャ「ある程度は伝わっていると思うが、フォンス少将にはカヌートのファントム隊の一部の指揮官を任せたいと思う」

少将は驚いた顔をする。ファントム隊の者は実力があるからな。だからこそ父さんは、実力のあるフォンス少将に任せたいのだろう。直ぐに真面目な顔になり

フォンス「はっ、お任せ下さい」

カヌート「頼むよ、フォンス少将」

不意に父さんが俺に話し掛けてきた

クランシャ「それと、オービタルリングの調査隊長にファントム隊の隊長クラスの者に任せたいので一人選出して欲しいのだが」

調査隊を…か。

それならば

カヌート「わかりました。フォンス少将、ヴェルクス大佐に司令室まで来るように連絡をしてくれ」

フォンス「かしこまりました」

俺の指示を受けたフォンス少将はファントム隊の隊長クラスの者がいる部屋に通信を送った

ヴェルクスside

俺はアペルクスにあるファントム隊の隊長クラスが集結している部屋で休んでいた

ヴェルクス「ふぅ…」
ファントム兵「お疲れですね、大佐」
疲れている訳ではないのだがな…
苦笑しながら部下に疲れていないと返事をすると

ファントム兵「司令室より通信が着ています」

司令室から？
俺が何かあったのか考えていると通信が繋がれる

ブォン

フォンス『失礼、私はアペルクス防衛部隊所属のフォンス・アルベート少将だ。其方にヴェルクス大佐はいるか？』

フォンスか…

ヴェルクス「俺はここにいるぞ、久しぶりだなフォンス」

フォンス『ああ、久しぶりだ、ヴェルクス』

懐かしい顔を見たな…

俺がそう思った時に

フォンス『殿下と陛下がお呼びだ、司令室まで来い』

殿下と陛下が…？

疑問に思いながら隊長室の部屋を後にして司令室に向かう

ヴェルクスｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ヴェルクス「ヴェルクス・ディンクル大佐、只今到着しました」

カヌート「来たかヴェルクス大佐。では父上、お願いします」

俺は父さんに説明をするようにお願いしる。

クランシャ「ヴェルクス大佐、君を呼んだのは理由があってな」
俺は推薦したが、実際は父さんに呼ばれて来たからかヴェルクス…
緊張しているな。

理由と聞きヴェルクスが内容を聞くと

クランシャ「オービタルリングは知っているな」

ヴェルクス「はい、ラダム獣が占拠している施設です」

中々の数のラダム獣がいて厄介な場所だあそこは

クランシャ「そのオービタルリングの調査隊の隊長を君に任せたい。
これはカヌートが推薦したのでな、任せても…よいか？」

父さんの言葉にヴェルクスが驚いたが、直ぐに表情を直した

ヴェルクス「かしこまりました、調査隊の隊長をお任せ下さい」

クランシャ「任せたぞ。早速だが今からオービタルリングに調査隊
を率いて向かってもらいたい」
オービタルリングに向かうように指示を出して、父さんはヴェルク
スを下がらせた

カヌート「では、私は部屋に戻ります」

クランシャ「うむ、わかった」

部屋に戻ったらパソコンを起動させある物のデータを表示させる

なんとしても完成させる…。

ナノマシンで強化した超抗力カタチニウム、ネオドライブ・・・そして、デメリットのない対消滅エンジンを

カズマｓｉｄｅ

ブルーアースにこっそり搭乗してオービタルリングに向かった俺はテッカマンに攻撃されたが、親父達が来てヴァルホークに乗ってラダム獣を撃退している。鉄拳は覚悟しとかねぇとな

Ｄボゥイが敵のテッカマンを追い込んでラダム獣とテッカマンが撤退、よっしゃあ

ブゥゥゥ

な、なんだ？

ミヒロ「お兄ちゃん、新手だよ」

新手？

ミヒロに指示された方を向くと

サヴァイブ軍じゃねぇかよ！

カズマｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ヴェルクス「連合…ではないな（トレイラーか？）」

量産機が二つ、小型の船が一つ、テッカマンが一つ、特機タイプが三つ、戦艦が一つか

ヴェルクス「各員、テッカマン、特機、戦艦に気を付けろ。攻撃開始」

第6話　ヴェルクスVSカズマ　後編

ヴェルクスside

カズマ『もらったぜ』

可変機構を有した機体か…ビームを射ってくるがその程度の射撃は当たりはせん。だが

ヴェルクス「（この中で一番性能がいいなこいつは）可変機構を有した機体は、私が相手をする。調査隊各員は、他の機体を攻撃しろ」

サヴァイブ兵『『『了解！』』』

さて、相手をしてやるか

ビームライフルを射ちながら距離を置く。敵機は何とか躱しながら距離を詰めようとする

ヴェルクス「若いな、接近戦で仕留めたいのか」

ブレードを構えて突撃して敵機がブレードで斬りかかってくる。隙が多いな……シザースナイフを構えてブレードを弾き飛ばして、左手で殴り、ブースターで距離を開く

ヴェルクス「まだまだだな、小僧」

リニアミサイルランチャーを構えて攻撃すると、敵機は上にブースターを吹かせて、回避するが

ヴェルクス「残念だったな……ファランクスミサイル、マトリクスミサイル、発射！」

背中から無数のミサイルと大型ミサイルから出てきたミサイルがブースターを吹きおえた直後で、隙がある敵機にヒットした。

通信を入れるか…

ヴェルクス「まだまだだな、小僧。次は腕を磨いておくんだな」

通信を切り、周りを見る

調査はできた、戦闘はついでたからもういいか。

ヴェルクス「全機、撤退するぞ」

私と調査隊各員はブースターを吹かして、この区域を後にする

ヴェルクスｓｉｄｅ　ｏｕｔ

調査を終えたヴェルクスが俺と父さんの前にいる

報告によるとトレイラーらしき者達と戦闘があったらしい

クランシャ「そうか、ご苦労だったな…下がれ」

ヴェルクスが司令室から出ていくのを見届けると

クランシャ「カヌート、お前はどう思う？」

調査結果か…

カヌート「オービタルリングを責めるのは得策では無いと」

これは感だが連合が何かしでかしそうだからだ

クランシャ「そうか、ならばそのように伝えておこう。それとカヌート、サヴァイブに戻るのは1週間後だ」

1週間後か…

準備をしておかないとな

そう思った俺は一息はいた

第7話　サヴァイブに帰還

オービタルリング調査から1週間が経過し、俺は父さん、ファントム隊、護衛艦隊共にサヴァイブ本星に戻った

三日後

俺は、シェアリィ少尉を自室に呼び、パソコンに手を付けていた

カヌート「ふぅ・・・」

設計図は出来た。後は超抗力カタチニウム（ナノマシン処理）、ネオ・ドライブ、対消滅エンジンが完成するのを待つだけだな

コンコン

カヌート「ああ、入ってくれ」

んっ、シェアリィ少尉か。呼んでから時間はあまり、経っていないのだが・・・来るのが早いな

シェアリィ「殿下、シェアリィ・エルミレス少尉、只今参りました」

真面目だな、少尉は

カヌート「シェアリィ少尉、貴女を呼んだ理由だが・・・私が戦場に出撃した際、僚機としてついてきてもらいたい」

俺の僚機として、ついてこられる力量を持った奴は少ない。
シェアリィ少尉の実力ならば、俺の僚機としてついてこられる為、僚機の要請を頼む為に呼んだのだ

シェアリィ「わかりました、殿下の僚機として恥じぬよう、全力で努めさせていただきます」

カヌート「頼もしいな、では、業務に戻ってくれ」

これで、戦闘が多少楽になるな。
シェアリィ少尉を下がらせて、再びパソコンに向き合う

カヌート「あれはまだ完成できない・・・シャドウセイヴァーの強化を考えないとな」

これからは、敵も強くなってくる。
目的を果たす為にもやられる訳にはいかん

だが、どういった強化をするか迷うな

カヌート「そういえば、スーパーナノスキン装甲が完成したと、母さんが言っていたな・・・」

武装も幾らか指揮官専用のが完成して、余っていると、母さんも言っていた

ならば、指揮官ようあの武装と対消滅エンジン開発の過程で、出来た武装を搭載しよう

それからある程度強化案を考えたら、母さんに通信を繋いだ

カヌート「母さん、シャドウセイヴァーの強化案が纏まったから、

データを送るよ」

ピピッ

エルミィ『うーん、これならば数週間で出来るわ。それと、ビームコートの改良型、ＡＢフィールドが完成したからそれを搭載するわよ』

ＡＢフィールドか・・・あって損はないな

カヌート「頼むよ」

エルミィ『任せなさいな、じゃあね』

強化案についての通信を切ると、俺は椅子に寄りかかった。

シャドウセイヴァーの強化に期待しないとな

第8話　機体開発依頼

しばらくすると父さんからアペルクスの司令官を任された、ルタライト中将から通信が届いた

何でも、自分の操作技術に機体が追い付かず、自分用の機体を作って欲しいそうだ

この件に関しては俺が担当することになった

とある機体を開発する為、俺は特殊兵器の開発、技術部門を担当しているから、頼んだのだろう

俺は司令官のルタライト中将の為に、製造を開始した

カヌート「何かいいアイデアは無いものか・・・」

「使わずにお蔵入りしているブラックホールエンジンを使っては？」

開発部門

ブラックホールエンジンか・・・対消滅エンジンの過程で出来たエンジンだ

現在、ブラックホールエンジンを搭載したエース用の機体のヒュッケバインがロールアウトされており、同時期に出来た何個かのブラックホールエンジンがあるのだ

カヌート「いいだろう、現在までルタライトが搭乗していた機体は？」

「多くの機体に搭乗していますが、ゲシュペンストに搭乗した時が一番、良い結果を出しております」

ゲシュペンストにブラックホールエンジンを装備か・・・

カヌート「色々と案はあるのだが・・・」

「ならば、専用ユニットを装備したら如何でしょうか？」

専用ユニット・・・それならば全員の意見が聞きたいな

カヌート「その手もあるか・・・いいだろう。ゲシュペンストにブラックホールエンジンを搭載し、専用ユニットを装備する方向で行く。今から一時間休憩を取るので、軽く案を考えて欲しい」

「「「「了解しました」」」」

さて、俺も考えないといけないな

一時間後

数多くの案が出されたが、その中で多くの賛成意見を手にした案、専用武器等を搭載するユニットに決定した

第9話　完成する三つの特機

ルタライト中将の機体を作り初めてから数週間が経った。

俺の目の前には完成したルタライト中将の機体がある。

本来ならまだ時間が掛かる筈だったのだがラダムやゾンダー等が地球圏で頻繁に出現している為、開発を急いだのだ。

機体の名はゲシュペンスト・タイプＧＦ。

装甲や出力を強化したゲシュペンストにブラックホールエンジンを搭載し、専用武器が搭載されたユニットを装備した機体だ。

武装はメガグラビトンバスター、フォトンレーザー、フォトンセイバー、リープスラッシャー、ハイパービームキャノン、ネオ・ブラズマカッターだ。

カヌート「・・・では補給物資をアペルクスに届けると同時に持ってくる。」

ルタライト『了解しました、では失礼します。』

ルタライト中将との通信を切って椅子に深く座る。

疲れた・・・まあゲシュペンスト、ランドグリーズ、ガーリオンの強化案が思い浮かんだからいい。

ピピッ

む、通信？・・・母さんからか。

カヌート「どうかしましたか、母さん。」

エルミィ『貴方に伝えることがあるのよ。まずはルタライトの件ご苦労様、それとシャドウセイヴァーの強化が完了したわよ。』

もう完成だと！
随分と早い・・・

エルミィ『貴方が頼んだ通りにしているわ。それとマナドライブの強化をしているから出力が上がっているわ。』

カヌート「・・・何かあったのですか？」
此処まで早いとなると何かあったに違いない。

疑問に思ってしまい、尋ねたら。

エルミィ『実はね、ルタライトが送ってきた情報にヴェルターの新拠点であるオービットベースの情報があったのよ。それを見たクランシャが

クランシャ「戦力が集まりつつあるヴェルターの力を見る必要がある。」

っと言ってね、貴方に見て欲しいそうなのよ。』

父さん・・・相変わらず面倒な事を任せるな。

カヌート「わかりました、引き受けましょう。調度ヴェルクスの新たな専用機、ラーヴァスサーガが完成しましたし、私の機体を含めてテストに丁度良いですよ。」

拠点を責めるのだから大きな戦闘になる。

それならば早く新機体に慣れておいた方がいい。

明日にでもテストをするか・・・

エルミィ『ありがとう。日時は一週間後よ。』

母さんが通信を切ったのを確認して、ファントム隊の士官室に通信を繋げる。

・・・そういえばヴェルクスの奴、オービタルリングの調査をした際に面白い奴がいたと言ったな。

その者に会うのが楽しみだよ。

ピピッ。

ヴェルクス『どうかなさいましたか殿下。』

カヌート「ヴェルクス、ヴェルターは知っているな。」

ヴェルクス『はい、地球の様々な者達が集まった組織ですね。』

中々手強い者達と通信でルタライト中将が言っていた奴らだ。

カヌート「そのヴェルターの新拠点であるオービットベースに一週間後に責める事になってな、責める部隊に父上から参加して欲しいと連絡があった。」

拠点を責めると聞いて驚いてしまってるな、ヴェルクスの奴。

ヴェルクス『ヴェ、ヴェルターの拠点をですか・・・厳しい戦闘になりそうですね。』

カヌート「そうだ、厳しい戦闘になる。その為、明日にはお前の新機体のラーヴァスサーガのテストを行う、以上だ。」

ヴェルクス『了解。』

ふぅ・・・今頃ヴェルクスに説明されて他のファントム隊士官は驚いているだろうな。

カヌート「君はどう思う・・・

シェアリィ。」

先程から私の隣で書類整理をしているシェアリィに尋ねる。

シェアリィ「そうですね・・・やっぱり厳しい戦闘だと思います。」

シェアリィは戦場で俺の僚機を頼んだのだが、その数日後に俺の補佐の仕事も頼んだのだ。

選んだ理由は僚機だからじゃない。

実は数日前、今にも泣きそうなシェアリィをシュミレーターの前で見たことがある。

カヌート『シェ・・・シェアリィ少尉、どうしたのだ?!』

シェアリィ『あ・・・殿下・・・』

カヌート『何があった、少尉。』

シェアリィ『・・・今日は・・・・・・今日は幼い頃に亡くした・・・お父さんとお母さんの・・・命日なんです・・・』

カヌート『・・・』

シェアリィ『亡くなった時間も今ぐらいだったので思い出してしまって・・・・・すいません、殿下に言うような事じゃないのに・・・』

ギュッ

シェアリィ『で・・・殿下?!』

カヌート『シェアリィ少尉・・・・・・いや、シェアリィよ。』

ぽんぽん

シェアリィ『！！』

カヌート『・・・随分と苦しかったな。・・・今は泣いていろ、顔は隠してやる。』

シェアリィ『ぐす・・・で、でんか・・・ひっく・・・わ、わたしは・・・』

との事があり、彼女の事が気になってしまったからなのだ。

余談だがこっそりと父さんが見ていて

クランシャ「未来も安泰だな・・・」

と言ったのは記憶に新しい。

ネオ・シャドウセイヴァーとカヌート（ネオ・シャドウセイヴァー完成時）のスペック

パイロット
カヌート・ミラージュ

機体
ネオ・シャドウセイヴァー

機体概念
カヌートの搭乗機体である、シャドウセイヴァーを強化改造した機体。スーパーナノスキン装甲、ＡＢフィールド、新型ジェネレーターを装備し、武装も幾つか追加されている為、優秀な機体に仕上がった

機体ステータス
［ＨＰ］：５０００
［ＥＮ］：２３０
［運動性］：１３５
［装甲］：１４００
［サイズ］：Ｍ
［移動力］：７
［移動タイプ］：空・陸・海［地形適応］：空Ｓ　陸Ｓ　海Ａ　宇Ｓ

特殊能力
ＨＰ回復Ｍ
ＥＮ回復Ｍ
ＡＢフィールド
ジャマー
気力系無効

ＳＰ系無効
精神系無効

武装
レーザーブレード
ファイアダガー
ガンレイピア
ディバインアーム
ハルバートランチャー
グラビトンバスター
クロス・ソードブレイカー

パイロットステータス
［性格］：大物
［格闘］：１６０
［射撃］：１６０
［防御］：１２０
［技量］：１８５
［回避］：１３２
［命中］：１３４
［ＳＰ］：５５

特殊技能
ニュータイプ
ＳＰ回復
指揮
底力
援護攻撃
援護防御
マルチコンボ

カウンター

精神コマンド

［ＬＶ１］：ひらめき

［ＬＶ５］：必中

［ＬＶ１５］：直撃

［ＬＶ２５］：覚醒

［ＬＶ３５］：絆

［ＬＶ４５］：愛

ＢＧＭ

揺れる心の錬金術師

極めて近く、限りなく遠い世界に

ラーヴァスサーガのステータスとヴェルクスのステータス

パイロット
ヴェルクス・ディンクル

機体
ラーヴァスサーガ

機体概念
ヴェルクスの近接戦闘の技能が高まることや戦闘技能にラーズアングリフが追い付かないことで製造された機体でヴァイサーガのカスタム機である。距離を置いた戦闘にも対応出来るようにされている。

機体ステータス
［ＨＰ］：５８００
［ＥＮ］：２００
［運動性］：１２０
［装甲値］：１６００
［サイズ］：Ｌ
［移動力］：７
［移動タイプ］：空・陸・海
［地形適応］：空Ｓ　陸Ｓ　海Ａ　宇Ｓ

特殊能力
ＥＮ回復Ｓ
ＡＢフィールド
分身
ネットキャンセラー
チャフキャンセラー

ブレイカーキャンセラー

武装
ファイアダガー
水流爪牙
地斬疾空刀
ソニックライフル
風刃閃
Ｆソリッドバスター
奥義・光刃閃

パイロットステータス
［性格］：冷静
［格闘］：１５６
［射撃］：１５８
［防御］：１２５
［技量］：１８０
［回避］：１２２
［命中］：１３０
［ＳＰ］：５５

特殊技能
指揮
底力
援護攻撃
ガンファイト
インファイト
ヒット&アウェイ
精神コマンド

［ＬＶ１］：必中
［ＬＶ５］：狙撃
［ＬＶ１５］：集中
［ＬＶ２５］：ひらめき
［ＬＶ３５］：直撃
［ＬＶ４５］：魂

ＢＧＭ
ＤＡＲＫ　ＫＮＩＧＨＴ
ＴＩＭＥ　ＴＯ　ＣＯＭＥ

ゲシュペンスト・タイプGFとルタライトのステータス

パイロット
ルタライト・スレンクス

性別
男

年齢
３６歳

種族
狼獣人（ウルフリング）

ＣＶ
堀内賢雄

概念
アペルクスの司令を任されている男でトップクラスの実力を持つ。かつて幼いカヌートに家族の命を助けられた事があり、王家に忠誠を心から誓っている。なお、ルタライトはフェレアの兄である。

機体
ゲシュペンスト・タイプＧＦ

機体概念
ルタライトの操作技術に追い付かせるように開発された専用機。最大の特徴として、ブラックホールエンジンを搭載している

機体ステータス
［ＨＰ］：５０００
［ＥＮ］：１８０
［運動性］：１２５
［装甲値］：１４００
［サイズ］：Ｍ
［移動力］：７
［移動タイプ］：空・陸・海
［地形適応］：空Ｓ　陸Ｓ　海Ａ　宇Ｓ

特殊能力
ＥＮ回復Ｓ
ＡＢフィールド
気力系無効
ネットキャンセラー
チャフキャンセラー

武装
ネオ・ブラズマカッター
ハイパービームキャノン
フォトンレーザー
リープスラッシャー
フォトンセイバー
メガグラビトンバスター

パイロットステータス
［性格］：強気
［格闘］：１５８
［射撃］：１５７
［防御］：１２０

［技量］：１８３
［回避］：１２７
［命中］：１２７
［ＳＰ］：６０

特殊技能
指揮
底力
援護攻撃
マルチコンボ
ヒット＆アウェイ
サイズ差無視

精神コマンド
［ＬＶ１］：必中
［ＬＶ５］：集中
［ＬＶ１５］：熱血
［ＬＶ２５］：闘志
［ＬＶ３５］：気迫
［ＬＶ４５］：覚醒

ＢＧＭ
ＴＩＭＥ　ＴＯ　ＣＯＭＥ

第１０話　オービットベース攻略

一週間後。

機体のテストを終えた俺とヴェルクスを含むファントム隊はアペルクスにいたのだが・・・

現在ヴェルターの拠点を責める為、オービットベースに向かっている。

俺はアマテラスに搭乗してるのだが、拠点を責めるだけあって周りの空気がピリピリしている。

っと見えてきたな、オービットベース。

通信を開いて・・・

カヌート「ファントム隊に告げる。パイロットは機体に搭乗し、出撃しろ。」

ぷつん

後はアルクスに任せるか・・・

カヌート「アルクス、艦は任せたぞ。」

アルクス「わかりました、殿下。」

ブリッジを出てパイロットスーツに着替えると格納庫に向かう。
もうヴェルクスやフェレア小隊は出撃している。

・・・出るの早いな。

そんなことを思いながら機体に搭乗し、既に待機しているシェアリィに通信を繋げる。

カヌート「シェアリィ、先に出ろ。」

シェアリィ『はい。シェアリィ機、アシュセイヴァー行きます。』

シェアリィのアシュセイヴァーがカタパルトから発進する。

俺も行くか・・・

機体を動かしカタパルトに固定する。

アルクス『どうかお気をつけて・・・』

カヌート「わかってるさ、アルクス。」

心配性の奴め

カヌート「カヌート・ミラージュ。ネオ・シャドウセイヴァー出る

ぞ！」

カタパルトから宇宙に打ち出される。

今、ヴェルターと黒い十字架が合間見える。

第１１話　加速する宇宙　前編

オービットベースが目前に見える状態に来た。

遠くから確認出来なかったが場の状況は木連とヴェルターが戦闘中である。

アルクス『如何なさいます？』

アルクスが戦闘中のヴェルターと木連を見て判断を尋ねる。

状況はヴェルターが優勢か・・・

どうするか考えていたら木連とヴェルターは此方の存在を気付かれた。

気付かれたか・・・まあいい。

カヌート「残念だか敵は此方に気付いたぞ。ファントム隊、仕掛けるぞ！」

戦闘中の木連とヴェルターに向かって、部下達が進んで行く。

カヌート「フェレア、お前は木連に仕掛けろ。ディストーションフィールドに注意しろよ。」

フェレア小隊に指示を出して通信を切るとヴェルターの方に機体を走らせた。

ピピッ

カヌート「！！」

ロックオンされたので回避行動を取ったら光がシャドウの横を通り過ぎた。

光が来た方向を見たら額に金色の角を兼ね備え、巨大なライフルを装備した機体と可変機構を有した白い機体が此方にライフルを向けていた。

確か・・・トールギス？とトーラスだったな。

・・・トールギス？のライフルは厄介だな。

カヌート「俺は金色の角を、シェアリィは可変機構の機体を相手しろ。」

シェアリィ『了解。』

ファイアダガーで攻撃したらトールギス？とトーラスは左右に別れて回避をする。

カヌート「さて、相手になってもらおうか。」

レーザーブレードを構え斬り掛かったらビームサーベルで受け止められた。

レーザーブレードとビームサーベルの衝突により、稲妻が飛び散り、

メインモニターが直視出来ない程の光に包まれる。
数秒間による打ち合いの後、反動で距離が開き、左手にガンレイピアを構えて発射する。
トールギス?はガンレイピアの連射を縦方向に回避、最後のビームを躱した瞬間に右手のメガキャノンを通常射撃で放つ。
出力を上げたＡＢフィールドで防御する

カヌート「ち、面倒な相手だ。」

此処までやるとは・・・油断はならん。

シェアリィの方は・・・押しているな。

味方の援護に行きたいのだが・・・

カヌート「さっさと終わらせてもらおうか。行け、クロス・ソードブレイカー！！」

機体から射出されたクロス・ソードブレイカーがトールギス?に向かう。

トールギス?はバルカンやヒートロッド、ビームサーベルで対応する。

カヌート「お前はよくやった方だが・・・まだまだだな。」

クロス・ソードブレイカーに対処仕切れなかったトールギス?は左手と右足、メガキャノンを破壊される。

そのままトールギス?をヴェルターの戦艦の方に蹴り飛ばし、クロス・ソードブレイカーを回収する。

シェアリィは・・・トーラスのビーム砲と両腕を破壊したか。

カヌート「シェアリィ、このまま味方機の援護に行くぞ。」

シェアリィ『わかりました。』

ヴェルクスはカズマと対峙していた。

ヴェルクス「そこだ。」

背中からソニックライフルを取り出して攻撃する。

カズマはそれを躱し、ビームショットランチャーで反撃する。

ヴェルクス「ぬぅ。」

ビームコートの役割を持ってるマントで防御する。

ピピッ

ヴェルクス「やるな・・・。」

カズマ『その声・・・オービタルリングの時の。』

やはりあの時の小僧か・・・

ヴェルクス「随分と腕を上げたようだな。」

カズマ『あん時と一緒じゃねぇんだよ。』

ランチャーを直した小僧はブレードを構えて突撃してくる。

ヴェルクス「ならば此方も。」

腰から五大剣を引き抜き向かってくる小僧を迎え撃つべく機体を突撃させる。

ヴェルクス「ぬおぉぉぉぉぉぉ！」

カズマ『おらあぁぁぁぁぁぁ！』

ピピッ。

フェレアから通信だと？

カヌート「何だ。」

フェレア『殿下、木連が撤退しました。』

レーダーを見たら確かに遠くにいる木連の反応が消えていた。

これならヴェルターとの戦闘に集中出来るだろう。

カヌート「引き続き戦闘を・・・」

ピキィィィン

っ！

この嫌な感じは・・・

ピピッ。

アルクス『殿下、艦のレーダーでアンノウンとゾンダーを確認、来ます。』

カヌート「あれは・・・」

現れたのはゾンダーと・・・髪のような奴と顎のような奴だった。

第１１話　加速する宇宙　後編（前書き）

これからカッコの前に名前は書かないでいこうと思います

第１１話　加速する宇宙　後編

『何だあれは・・・』

アルクスが驚くのも無理は無い。

ゾンダーなどはわかるが、奥にいる人の部位の形をした存在だからだ。

「奴らには迂闊に近づくな。ファントム隊、撤退の準備をしろ。」

『『『了解。』』』

ガオガイガーを模したに向かってグラビトンランチャーを発射する。

「・・・小僧、勝負は預けたぞ。」

『・・・こんなこと言うのはなんだけどよ、死ぬんじゃねぇぞ。』

ふっ、言ってくれるな小僧め。

「小僧・・・名前は何と言う？」

『俺はカズマ・アーディガン、こっちは妹のミヒロ・アーディガンだ。』

「私はヴェルクス・ディンクルだ・・・」

カズマに名前を告げたら通信を切り、母艦のアマテラスに向かう。

「戟と槍のハルバートランチャー・・・奴を滅ぼせぇ。」

ハルバートランチャーを発射してゾンダーと距離を取る。

ゾンダー達はヴェルターの方を優先して攻撃しているのが幸いだな・・・

ピピッ

「何だフェレア？」

爆撃機のようなゾンダーをハルバートランチャーで対応していたらフェレアから通信がきた。

『こちらフェレア、木連を攻撃した部隊は全機帰還しました。』

「よし、丁度全機の帰還も完了した。ファントム隊、撤退するぞ。」

ファントム隊がアペルクスに向けて撤退する中、俺は寒気を感じた髪と顎の存在を考えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1738x/

黒い十字架の鴉

2011年12月19日00時53分発行